平成26年度　実践研究報告書

（不登校問題についての理解と支援の在り方について）

感情の言語化を意識させる中学生と学級担任との関係づくりの実践

－心的安全空間を広げる手立てとして－

香南市立野市中学校　教諭　竹島ゆかり

１．実践内容

（１）研究の概要

不登校の未然防止策としての支援方法についての研究を行ってきた。その手がかりとして、小谷(2004)が「個人がいかなる脅威や怖れからも自由でいられる心の安全空間」と定義する「心的安全空間」を広げていくことが支援につながるものと考えた。また、小谷は心的安全空間は個人の心的安全空間をもとに集団の安全力学で成熟すると述べている。筆者が大学院在学中は心的安全空間を広げる手立てとして、感情の言語化を意識した中学生と学級担任との「交換日記」についての取り組みを行ってきた。結果、心的安全空間を広げる手立てとして，生徒が自分の感情を意識して言語化し，その感情を学級担任が受容・共感する「交換日記」は一定の効果は得られたものと考える。そこには、ロジャーズ(1961)が「生徒をありのままに受容し，そして，生徒がいだいている感情を理解することができるならば，意味のある学習がおこる」と述べているように、生徒の変容が見られたからである。

（２）本年度の取り組み

本年度は学校現場に戻って実践を行った。赴任校は転任１年目で、校務分掌は特別支援学級(自閉症・情緒障害児)の担任となった。そこで在学中に研究してきた「交換日記」の実践は難しいため、生徒との関係づくりにおいて、生徒が感情の言語化を意識して、生徒の感情を受容する担任と生徒の一対一の関係づくりから、小集団の関係づくりを実践した。

〇入学当初の学級

本学級の生徒は１年生６名である。基本的には特定の授業の取り出しであるが、小学校時にほとんどの授業を特別支援学級で過ごしてきた生徒や、不登校生徒もおり、学力や学習の進度の差も大きい。生徒全員に共通して不安感が強く、中には集団への適応が困難な生徒もいた。一人ひとりの課題が異なり、個別の対応を求められることが多く、それぞれの支援をどのように行っていくかが、本学級の課題であった。

特別支援の形態は、入学前に保護者と生徒自身と面接を実施し、入学当初は交流学級での活動に参加し、様子を見ながら授業の支援を行うこと、授業の取り出しについては、小学校に引き続き国語と数学の授業とすることの確認を行った。

生徒たちは新しい級友や小学校とは違う中学校生活に戸惑いを感じ、授業が開始されると、次々と特別支援学級へ避難したがるようになっていった。そこで、時間の枠を固定することで安定を図れるのではないかと考え、小学校と同様に国語と数学の授業の取り出しを行った。そのことにより、一定のリズムを作ることはできた。しかし、特別支援学級でほとんど過ごす生徒や登校し出した不登校生徒への対応と複雑な対応を迫られる状況であった。その上、どの生徒も少人数対応での支援を受けてきていたため、同じ学級に同じ学年の生徒が６名も在籍して

いる状態は初めてで、小集団への対応にも戸惑っていた。

〇感情の言語化を意識した担任との関係づくり

まずは、担任である筆者との関係づくりを重視し、生徒を理解することを第一に個別対応を行った。その際にはできるだけ生徒の感情を言語化していくことを意識し、生徒の気持ちを受容的に理解することをこころがけてきた。そのため、個別の対応の時間をできるだけ取る必要があった。朝早く登校する生徒とは朝の時間を利用し、他生徒とは、放課後の部活までの時間もしくは部活後に特別支援学級で過ごす時間を確保し、個別にかかわる時間を確保した。

生徒の感情表現は、言語で表現できる場合もあれば、言語表現が難しい場合もあった。時には感情を整理できずに行動で現したり、或いは何か別の対象物に自分や周囲の気持ちを表現するなど様々であった。そこで、表現方法として、箱庭や粘土、折り紙、遊びなどを自由に選べるように環境を整えた。その結果、生徒の表現を筆者が受容的な態度をとることで生徒は安心して、自分なりの表現方法を使って自分の感情を自由に表現していった。それは担任である筆者との関係性において、心的安全空間が広がったものと考えられる。

〇一対一の関係から小集団の関係づくりへ

筆者との関わりが安定してくると、筆者を通して他生徒とつながろうとする傾向がみられるようになった。そこで、夏季休業中を利用し、ある一定の自由な中で同じ時間を同じメンバーで過ごすこととした。日程は前期・後期各１週間半日日程で、夏休みの課題に取り組む時間とみんなで自由に活動する時間に大きく分けた。全員参加ではなかったが、十分な活動時間を確保することで、生徒自身が仲間と一緒の表現活動が可能になったと考えられる。この時間は有意義で自由に意見を出し合いながら活動できるようになったことは、小集団においても心的安全空間が広がったものと考えられる。

二学期からは、小集団での活動を取り入れた自立活動を行った。すると、個別対応では見えなかったが、集団生活での各生徒の得意なことや課題が見えてきた。そこで、小集団での話し合いを活用し、ソーシャルスキルトレーニングを行うことが可能となった。生徒たちは自分たちの意見を出し合いながら、お互いの良さや課題を見つけていくこととなった。

２．成果と課題

本年度の取り組みは「交換日記」を介してではなかったが、心的安全空間を広げる手立てとして、生徒の感情を言語化することを意識し、生徒の感情を受容することを行ってきた。はじめは担任との一対一の関係性から個人の心的安全空間を広げることを試みた。言語表現に限らず生徒の示す表現を受容していった結果､生徒は伸び伸びと自由に表現することが可能となり、一対一の関係性において、個人の心的安全空間は広がったものと考えられる。

また、生徒たちは個人の心的安全空間が広がると、次に小集団での関わりを求め、小集団の中においても安心感を得ることができ、自由に表現することが可能になっていった。このことは、心的安全空間の成熟と捉えることができるのではないだろうか。そのため集団の中において、お互いの良さや課題をともに考えることが可能になったものと考えられる。

課題としては、さらに大きな学級集団においても自由にいられる心的安全空間の広がりである。小谷(2004)は集団における安心・安全感を体験していくことで、対象としての心的安全空間をもつことができると述べている。つまり、集団がちがっても心的安全空間を対象として維持することができるというのである。そのためにも生徒の表現するサインを見逃さず、感情的な段階での受容を大切にしていくことが大事である。